

複合動詞「～こむ」の程度深化の 用法をめぐって

—方向性添加の用法と一箇所集中の用法からの派生—

甲斐 朋子

1. はじめに

現在使われている複合動詞「～こむ」には、大きく分けて二つの用法が見られる。一つは、「飛びこむ」「縫いこむ」のように、「～（領域）に、～（様態、方法）で入る／入れる」といった前項動詞の動作・様態に一定の方向性を添加する用法¹⁾である。もう一つは「考えこむ」「買いこむ」のように、「すっかり～する／十分に～する」という前項動詞²⁾の状態や、動作の程度を深めていく用法³⁾である。

現在、程度深化の用法は、方向性添加の用法と同じくらい日常よく使われている。しかし、中古の時代で使われていた用法として見られるのは、方向性添加の用法と、「人や物が一箇所に集中して～する。～して混雑する。」⁴⁾という、現在でも使われている「立てこむ」のような用法⁵⁾である。「考えこむ」や、「買いこむ」といった前項動詞の程度を深める用法は今回の調べでは見られなかった。17世紀初頭に編纂された日葡辞書によると「思いこむ」の項で、「深く愛する」という例が見られる⁶⁾。

このような前項動詞の程度を深める用法は、方向性添加の用法や、一箇所集中の用法とどのような関係にあるのだろうか。程度深化の用法が、突然変異的に出現したものだとは考えにくい。単純動詞の「こむ」からの派生ではないかといった推測を姫野氏や森田氏もされているが、その経緯は明らかにされていない。

現在では単純動詞「こむ」自体に、内部移動を表す用法が見られない。このことが「こむ」と「～こむ」との関連を不明確にしている一因であると考えられる。今回の調べでは「～こむ」の派生には、「こむ」の用法が基礎にあり、歴史的に初期の時代で現れた「こむ」の「領域の外から領域の中への移動」という「移動の経路」を根底にもちながら時代とともに派生してきたことが推測された。本稿では「～こむ」の用法の1つである程度深化の用法の派生について、認知言語学的分析方法を用い考察を行う。

研究対象として、姫野(1978)の巻末リストにある複合動詞「～こむ」(275語)をも

とに、その実例を「CD-ROM版新潮文庫の100冊」及び、小学館「日本国語大辞典」等から抜き出し分析を行った。

2. 単純動詞⁷⁾「こむ」の基本義

2. 1. 古語における「こむ」・「こむ(こめる)」・「こもる」

上代における「こむ」には、「こもる」に対する他動詞の「こむ」と、自動詞の「こむ」があった。他動詞の「こむ」は下二段活用であり、現在では「こめる」という形で使われているものである。今回の調べではこの時代の記録から、「動作主が対象をある領域内へ移動させる」という他動詞の「こむ」の用例は見られなかった。

この時代における「こむ」及び「こもる」の用法について古語辞典⁹⁾の記述をまとめると、次の表1のようになる。

表1. 「こむ」・「こもる」の上代の用法（日本国語大辞典より）

	こもる	こむ(こめる)	こむ	こむ
	自・ラ行4段	他・マ行下2段	自・マ行4段	他・マ行4段
①	内に包まれて見えない。 包みこまれている	こもらせる。入れておく。	水が流れこむ。	
②	ひそむ。ひきこもる。外部との交渉を断っている。	表にあらわさない。つつみ隠す。		

この表1だけでは歴史的根拠としては十分ではないが、「こむ」・「こむ(こめる)」・「こもる」についての対比としてみると、「内部移動」という現象を、以下の3つの視点から捉えていたことが推測される。

(ア)：対象⁹⁾に焦点を当てた場合 → こむ(自)、こもる①

(イ)：動作主¹⁰⁾に焦点を当てた場合 → こもる②

(ウ)：動作主の対象に対する行為に焦点を当てた場合 → こむ(こめる)①、②

現在の複合動詞「～こむ」の用法に見られる「領域の外から領域内部への移動」という方向性は、この時代の「こむ」の意味が保持されていると推測される。

2. 2. 歴史的にみる「こむ」の方向性の用法と、混雑の用法

上代において見られた、「水が流れこむ」という用例を以下に示す。

(1)

此田者 <small>コノウケニシテ</small> 天守難 <small>シメテ</small> 漚 <small>シメテ</small> 、水濱島 <small>シメテ</small> 費 <small>シメテ</small> 、功極多、收穫甚少 (安政紀元年)

(時代別国語大辞典上代編)

この内部への方向性を示す用法に続き、中古に入ると、「ある場所いっばいに人や物が入り合う。」「用事が一度に重なり合う。」¹¹⁾ という現在でも使われている用法が見られはじめる。以下にその用例をあげる。

(2) 人げ多くこみては、いとど御心地も苦しうおはしますらむ (紫式部日記)

(日本国語大辞典)

また、近世初頭の文献である日葡辞書には、内部への方向性を表す用法として、「動作主が対象をある領域内に移動させる」という他動詞の用例が見られる。

(3) Comi、u、ôda コミ、ム、ガ (籠・込み、む、うだ) 中へ入れる。

Tepponi cusurio comu. (鉄砲に薬を籠む)

鉄砲に弾丸弾薬を装填する、すなわち、装薬をする。 (邦訳日葡辞書)

上記二つの用法のうち現在においても、単純動詞「こむ」の用法として使われているのは、「混雑する」という用法だけである。

このように通時的に単純動詞「こむ」の用法を追っていくと、「こむ」自体が、「対象が領域の外から領域の内部へ移動する」という方向性を担った動詞であったことがわかる。現在の単純動詞「こむ」にはこの用法はないが、複合動詞「～こむ」には「こむ」を伴うことによって、「方向性」が添加されるものが見られる。また、「混雑する」という単純動詞の用法も、早い時代から使われ始めており、単純動詞「こむ」の方向性を担った用法との間に、何らかの共通概念が存在することが推測される。

3. 歴史的にみる複合動詞「～こむ」の三つの用法

中古の時代には既に、現代用法の方向性添加の用法と一箇所集中の用法に関連があるとみられる用例がある。

方向性添加の用法

(4) をかしき古事をもはじめより取りこみつゝ、すさまじきをりをりを詠みかけたるこそ物しき事なれ (源氏・帚木)

一箇所集中の用法

- (5) ところどころの御とぶらひの使など立ちこみたれど (源氏・葵)
(6) 御前の人々、道もさりあへず来こみぬれば (源氏・関屋)

上の(4)が方向性の用法との関わりが見られる例であり、(5)、(6)が一箇所集中の用法との関係が見られるものである。この時代には、「考えこむ」や、「着こむ」、「鍛えこむ」といった、程度深化の用法を表していると考えられる用例はまだ見られない。中世末期から近世に入ると、程度深化の用法と見られる用例が出てくる。

今回、日本国語大辞典で調べた限りでは、「思いこむ」と「買いこむ」の例が、程度深化用法の初期の用例ではないかと推測される。以下、(7)に「思いこむ」を、(10)に「買いこむ」の用例をあげる。

程度深化の用法:a

- (7) Vomoicomi、u、oda. 杵仁、ム、ウダ : 深く愛する (邦訳日葡辞書)

(7)の用例は、「思う」という前項動詞の状態を深めていった結果、「深く愛する」という解釈が成立する。この用法に先駆けて用いられていたと見られる「立ちこむ」、「来こむ」などの一箇所集中の用法が、領域内の状態の程度を深めていく。このことから「思いこむ」のような用例は、一箇所集中の用法からの派生ではないかと推測される。

近世末期から明治期の作品に、(7)以外にも一箇所集中の用法からの派生と見られる用例がある。

程度深化の用法:a

- (8) コノ ホンニ horekonde (ホレコデ) タカク カッタ (和英語林集再販)
(9) 腰掛に尻餅を搗いて塾々(つくづく)と考込んだ儘 (浮雲；二葉亭四迷)

(日本国語大辞典)

以下にその他の例をあげる。

気負いこむ、決めこむ、こまりこむ、信じこむ、しょげこむ、だまりこむ、ふさぎこむ、老けこむ、老いこむ、老いぼれこむ、ぼけこむ、やつれこむ、弱りこむ 等

程度深化の用法:b

- (10) 一日に三貫目づつ、雪山のごとく繰綿を買込(カヨミ) (日本永代蔵)

(日本国語大辞典)

(10)の用例は、「動作主が対象を領域内に移動させる」という方向性を保持しているとみられる。しかしこの例では、対象を自己の領域内へ移動させるという方向性だけでなく、将来の使用を見越して十分すぎるほどの繰綿を買い入れることから、領域内の状態が「粗から密」へと変化することを表現していると解釈することができる。この用例の派生については、本稿 7.1 で詳しく述べる。以下にその他の例をあげる。

買いこむ、借りこむ、着こむ、かぶりこむ、蓄えこむ、食べこむ、ためこむ、抱えこむ、しょいこむ、背負いこむ、着せこむ、かぶせこむ、履きこむ、等

程度深化の用法:c

(11) 走り込んで下半身を鍛える。 (現代国語例解辞典)

現在における程度深化の用法で、もう一つよく使われるのが(11)のような例である。今回の調べでは、この用法は近世および、それ以前の文献には見当たらなかった。現代の用法の中でも、比較的新しい用例であることがうかがえる。以下にその例をあげる。

歌いこむ、泳ぎこむ、書きこむ、鍛えこむ、投げこむ、走りこむ、弾きこむ、読みこむ、洗いこむ、煮こむ、掃きこむ、磨きこむ、等

以上のように古い時代から順に「～こむ」の用例を追っていくと、「～こむ」の用法は、単純動詞「こむ」の「内部への方向性」を保持した用法と、「こむ」の「混雑する」という「領域内の状態変化」を表す用法のそれぞれと繋がりを持ちながら発達してきたことが推測される。

次にこれらの用法の派生について、それぞれの用法が持つ「こむ」の「内部への方向性」と、「領域内の状態変化」がどのようにして引き継がれていったかについて認知言語学的手法を用い説明を試みたい。

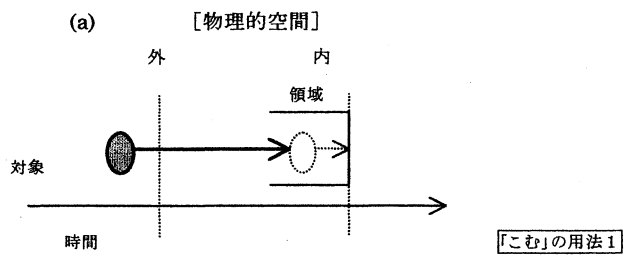
4. 「こむ」の用法1と「～こむ」の方向性添加の用法との関連付け

4. 1. 単純動詞「こむ」の用法1

本稿の 2.2. で触れた古語の単純動詞「こむ」の「水が流れこむ」という用例から、

「こむ」の意味を一般化すると、[ある領域の外から、領域内部への「移動の経路」] というように表すことができる。これを図式で表すと図1のように表すことができる。図中の黒丸は移動する対象を表し、太い実線の矢印は対象の移動経路を表す。その移動経路は領域内に向かっており、点線の円は移動が完了したときの対象の位置を表す。点線の矢印は対象が領域の奥まで移動する時の経路を示したものである。この移動が時間の変化とともに行われることから、図の一番下に時間軸を表す実線を付した。図1の太い実線は、「こむ」という概念全体において、「移動経路」がプロフィール¹²⁾ されていることを示す。プロフィールとは、ある概念を言語化したときの意味の中心となるものである。詳しくは本稿7で述べることにする。

<図1>



4. 2. 複合動詞「～こむ」の方向性添加の用法

本稿3.の(4)から「～こむ」の方向性添加の用法を見てみる。この用法として使われるのは「取りこむ」という他動詞用法の他に、「走りこむ」などの自動詞用法もある。

(4) をかしき古事をもはじめより取りこみつゝ、すさまじきをりをりを詠みかけたるこそ物しき事なれ (源氏・帚木)

1. 動作主が 対象を 領域に 取りこむ
2. 動作主が 領域に 走りこむ

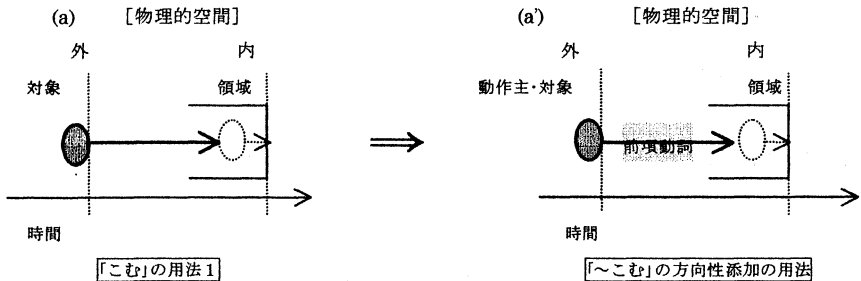
この用法に見られる「～こむ」の前項動詞は、「動作主又は、対象の領域外から領域内部へ移動を完結させるための方法・手段」を示す。時間軸に沿って、内部移動の

現象を捉えた場合、領域外の起点から領域内の終点までの動作主又は、対象の移動の様態を表すと考えられる。

単純動詞「こむ」の用法1で、「こむ」の意味を「ある領域の外から、領域内部への移動の経路」というように一般化した。用法1と「～こむ」の方向性の用法に共通して見られる抽象的な知識構造を、図1の(a)のような「移動の経路」として表すことができる。これを以後スキーマ1¹³⁾とよぶ。

図2の(a)、(a')は、どちらも物理的空間における動作主又は、対象の内部移動を示すものである。(a')の「～こむ」の用法において、太い実線は動作主、又は対象の移動の経路を表し、**前項動詞**は内部移動の実行から完了までの方法・手段を表している。すなわち、スキーマ1をどのような様態のもとで具体化するかを表していると考えられる。

〈図2〉



5. 「こむ」の用法2と「～こむ」の一箇所集中の用法との関連付け

5. 1. 単純動詞「こむ」の用法 - 2

本稿の2.2. であげた以下の用例から単純動詞「こむ」の2つ目の用法について考えてみる。

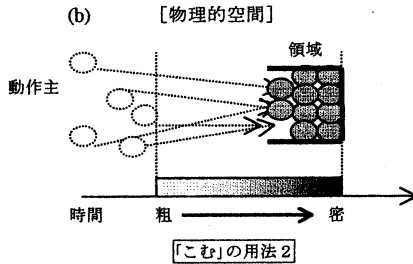
(2) 人が多くこみては、いとど御心地も苦しいおはしますらむ (紫式部日記)

(日本国語大辞典)

我々は、「領域内に同質のものが増える」ことは、「領域内の物質の量が増える」ことであり、「領域内の物質が増える」ことは、「領域内の密度が高まる」ことであると捉える。このような現象把握は、我々の経験に根ざしているものである。「動作主の領域内への移動」という同一の行動が、複数の動作主によって起こった場合、「領域

内の個体数が増える」、その結果「領域内の密度が高まる」として、この状況を捉えることが可能になる。すなわち、領域内においては、「粗から密への状態変化」が起こると捉えることができる。これを図式で表すと図3のようになる。「こむ」の用法1では「移動の経路」がプロファイルされていたのに対し、用法2では、領域内の状態がプロファイルされている。

〈図3〉



5. 2. 複合動詞「～こむ」の一箇所集中の用法

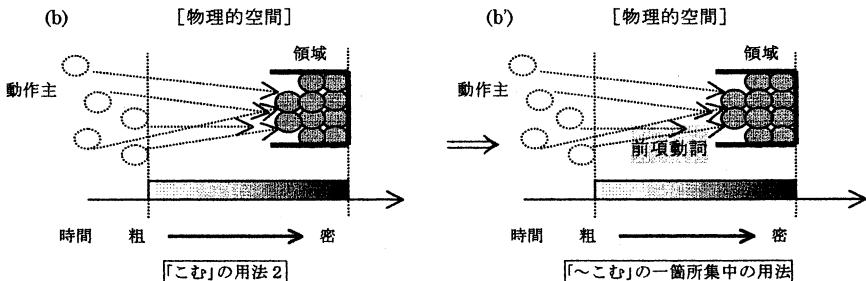
本稿の3. の(5)、(6)から考えると、この用法は、動作主又は、対象による前項動詞の行為を複数の個体が行うことによって、「粗」から「密」への空間的状态変化が引き起こされるものである。

3. (5) ところどころの御とぶらひの使など立ちこみたれど (源氏・葵)

(6) 御前の人々、道もさりあへず来こみぬれば (源氏・関屋)

図4の(b)に「こむ」の用法2、(b')に「～こむ」の一箇所集中の用法を示す。どちらも物理的空間における領域内の「粗から密」への状態変化がプロファイルされている。

〈図4〉



時間軸上の□は、時間の経過とともに変化する領域内の状態変化を示したものである。

「こむ」の用法2と「～こむ」の一箇所集中の用法とに共通して見られる抽象的な知識構造を、図3、図4の(b)のような空間領域内の「粗から密」への「状態変化」として表すことができる。これを以後スキーマ2と呼ぶ。

「～こむ」の一箇所集中の用法は、前項動詞の行為によって領域内の状態変化が引き起こされることから、スキーマ2を具体化したものと考えることができる。

6. 一箇所集中の用法と程度深化の用法との関連

6. 1. 一箇所集中の用法からの派生 その1

ここでは、本稿3.で触れた「来こむ」、「立ちこむ」等の一箇所集中の用法から、同じく3.で取り上げた例「ほれこむ」、「考えこむ」等の程度深化の用法aへの派生についてみる。この派生は、物理的空間領域の事象である一箇所集中の用法に内在するスキーマ2を、メタファーによって抽象的概念領域に写像することによって、起こったものだと考えられる。このメタファーという概念を、認知言語学におけるLakoff, G.の一連の研究(1980)、(1987)では、次のように定義している。

具体的に直接経験できる概念領域のものを通して、より抽象的な直接経験できない概念領域のものを理解するプロセス

一例として山梨(1995)がメタファーによる拡張として扱っている事例をあげる。山梨によれば、「襲う」という動詞は、基本的に有生[animate]の主語と目的語をとり、この点から見ると下のAタイプの構文だけが可能な表現ということになる。しかし、実際の日本語の用法としては、具象から抽象へのメタファーリンクによる拡張によって、非有生[inanimate]の名詞を主語、目的語にとるBタイプの構文、さらに抽象名詞を主語にとるCタイプの構文も慣用的な用法として定着している。

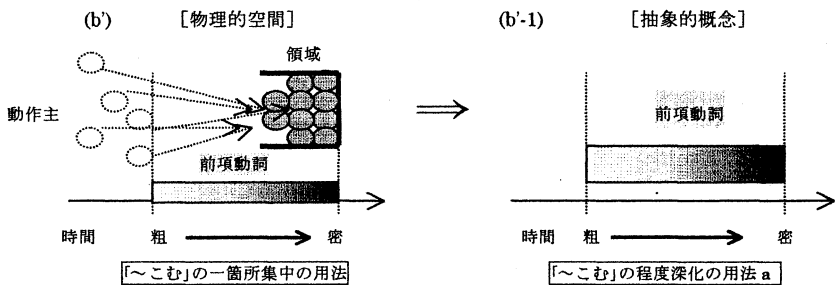
- (具象的) A. 鷹が獲物を襲った。
 : B. 台風が本州を襲った。
(抽象的) C. 不況がその国を襲った。

「～こむ」の場合も同じように、物理的な空間領域から抽象的な概念領域への用法の拡張が起きていると考えられる。この程度深化の用法は、「思いこむ=深く愛する」、「ほれこむ」、「考えこむ」などのように、前項動詞の表す感情や思考の状態の程度を深めていくものである。先述のように「～こむ」の一箇所集中の用法では、「こむ」が後接することにより、物理的空間における前項動詞の行為が、領域内の密度を高め

た。一方、程度深化の用法においては、前項動詞が感情や思考を表す動詞であるため、物理的な空間領域ではなく、抽象的な概念領域内の感情や心理状態を深めていると考えられる。「思う」、「惚れる」などの抽象的な概念を表す領域においても、「粗から密への状態変化」が起きると想定することができる。このことから、「思いこむ」などの程度深化の用法は、メタファーによって物理的空間領域から抽象的概念領域への写像が行われた結果、一箇所集中の用法から拡張されてできた用法であると言える。

〈図5〉に一箇所集中の用法から程度深化の用法aへの派生を図式化する。(b')は物理的空間領域における領域内の状態変化を表す。(b'-1)は、「思う」や、「惚れる」等の前項動詞の表す状態が、時間の経過とともに深まることを示している。

〈図5〉



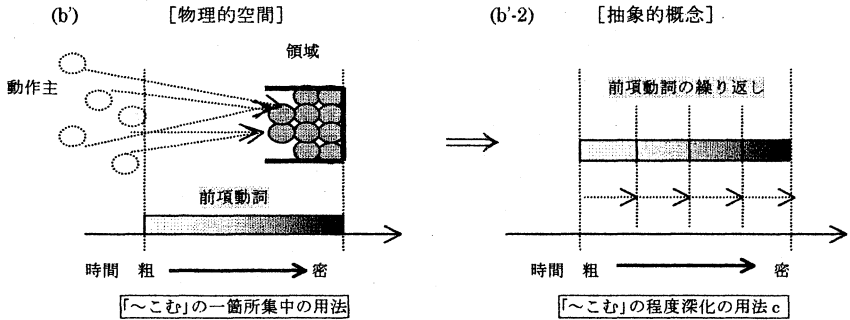
6.2. 一箇所集中の用法からの派生 その2

「走りこむ」、「鍛えこむ」のような本稿3の程度深化の用法cの用例から考えてみると、その動作を繰り返し行うことにより、動作主の技術や対象の状態が質の高い状態へと変化していくことを表すものである。ここでも、一箇所集中の用法から程度深化の用法へ派生する過程を、メタファーにより説明付けられる。我々は日常の経験から、ある容器の中にボールを入れ続けると、容器の中のボールの量が増えるということを知っている。「ボールを入れるという動作の繰り返し」の結果、「容器中のボールの量が増す」という物理的空間における現象を、メタファーを用いて「同質の動作の繰り返し」の結果、「体力・質が向上する」という抽象概念へ写像する事により、程度深化の用法が派生したと考えられる。したがって、この二つの用法には、「粗から密」の状態変化であるスキーマ2が共通して存在する。

〈図6〉に一箇所集中の用法から程度深化の用法cへの派生を図式化する。(b')は物理的空間領域における領域内の状態変化を表す。(b'-2)は、前項動詞の繰り返し

により、前項動詞の表す状態が時間の経過とともに変化する事を示す。

〈図6〉



7. スキーマ1とスキーマ2との関連

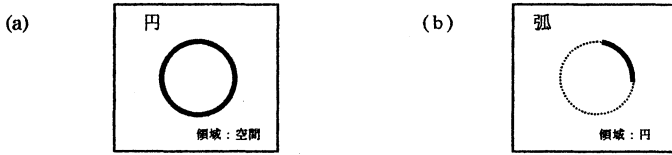
ここでスキーマ1の「移動の経路」と、スキーマ2の「状態変化」について、どのような関わりがあるのか考えてみたい。

混雑するという「こむ」の用法2においても、「こむ」という状態を時間軸に沿った動作の結果起こる状態として捉えると、「動作主がある領域の外から領域内部へ移動する」という、「移動の経路」が存在する。このことは、空間領域における「移動の経路」を表すスキーマ1と「粗から密」への状態変化を表すスキーマ2との間に、以下のような2つのプロセスが関与していると考えられる。

- ①. ベース¹⁴⁾内でのプロファイルの移動
- ②. 単数から複数への変換

①について考えてみると、我々が語の意味を得る際に、焦点化される部分的な構造と、焦点化されない背景となる構造がある。前者の焦点化された構造を「プロファイル」、背景の構造を「ベース」とよぶ。この説明として挙げられているのが、「弧」という語を定義する際、必ず「円」という概念がその基盤にあり、それを踏まえた上で、円の一部に焦点を当てたものが「弧」であるというものである。図7に図式化したものを示す。「円」がプロファイルされる時のベースは、円が存在する空間領域である。一方、「弧」がプロファイルされているときのベースは、「円」であると考えられている。

<図7>



(Langacker 1987: P.184)

スキーマ1からスキーマ2への派生についても、上記の概念を想定することが可能である。図8にスキーマ1と2を図式化する。

<図8>

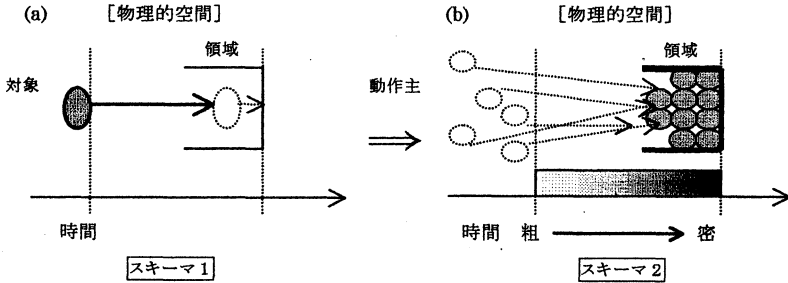


図8の(a)のスキーマ1で、プロフィールされているのは、対象の内部移動を示す移動の経路である。(b)のスキーマ2において、プロフィールされているのは、領域内の状態変化である。動作主の移動の経路は、ここではベースとして認識されている。

次に②について考えてみると、領域内の状態変化がプロフィールされる際に、次のような認知プロセスが働いていると想定される。我々は、「同質のものが増える」ことは、「物質の量が増える」ことであると捉える。このような現象把握は、我々の経験に根ざしたものである。これは単数のものだけでなく、複数の同質のものについての現象においても、見られるものである。ことから、「複数の動作主がある領域内に移動する」という現象から引き起こされる領域内の状態変化を理解する場合、「同様の移動が複数の動作主によって行われた」結果、「領域内の密度が高まる」として、この状況を捉えることが可能になる。スキーマ2はスキーマ1の「移動の経路」を保

持している。しかし、言語化される際には、プロフィールの移動により、ベース部分の「移動の途中の経路」は表れてこないと考えられる。

7. 1 スキーマ1とスキーマ2からの派生

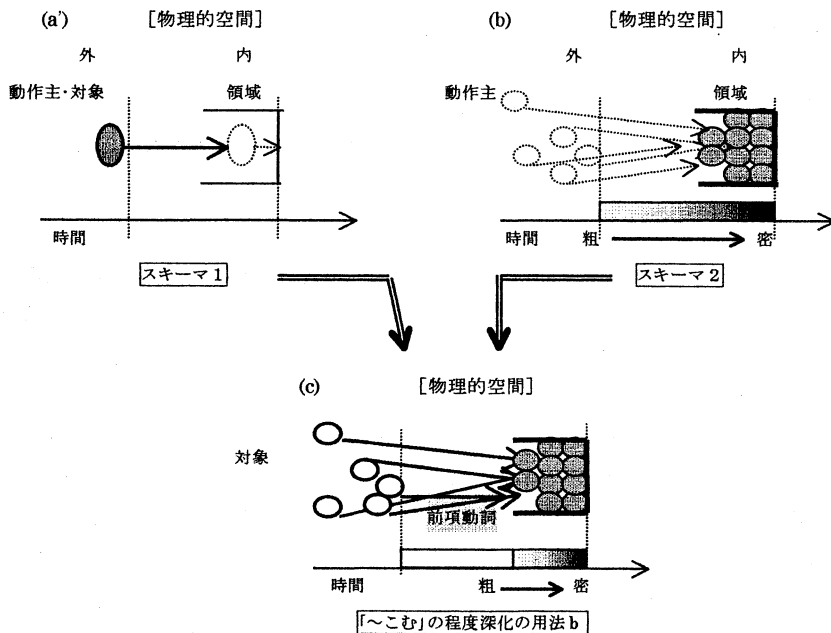
スキーマ1とスキーマ2を具体化したのが、本稿の3. の程度深化の用法bの例である。

3. (10) 一日に三貫目づつ、雪山のごとく繰綿を買込(カミ) (日本永代蔵)
(日本国語大辞典)

この用法に見られる「～こむ」の前項動詞は、「動作主が対象を領域外から領域内部へ移動させるための方法・手段」を示す。時間軸に沿って、内部移動の現象を捉えた場合、領域外の起点から領域内の終点において、動作主が対象を移動させた方法・手段を表している。この用法は「対象を自己の領域内に移動させる」という意味を持つ。このことから、スキーマ1の「移動の経路」を、前項動詞の動作を通して実行することにより、スキーマ1を具体化したものであると考えられる。

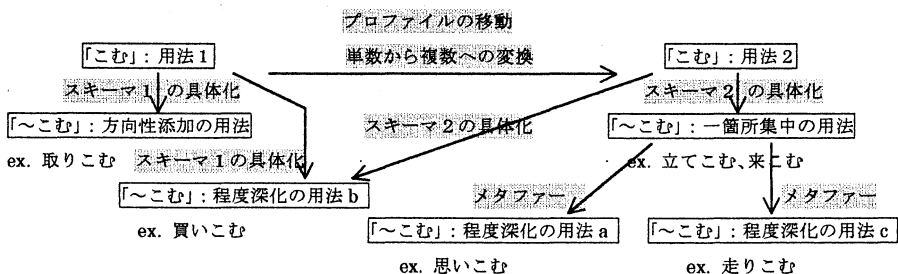
一方、スキーマ1の具体化だけであれば「買い入れる」という語が表す意味と同じである。しかし、「買いこむ」、「着こむ」等の「～こむ」の用例には、「ある目的のために対象を通常以上に、自己の領域内に移動させ、領域を対象で満たす」という意味が伴う。これらの用例が、領域内の「粗から密への状態変化」を内在させていることから、スキーマ2とも関連があると考えられる。領域内の状態変化が、「買う」や「着る」といった前項動詞の動作によって引き起こされることから、スキーマ2を具体化していると考えられる。スキーマ1とスキーマ2からの派生を図式化すると〈図9〉のようになる。

〈図 9〉



8. まとめ

以上の派生の過程をまとめると、以下ようになる。



今回の調べから「～こむ」の程度深化の用法は、「こむ」の用法1と方向性添加の用法が持つスキーマ1と、「こむ」の用法2と一箇所集中の用法が持つスキーマ2を通して派生してきたことがわかった。

また、スキーマ1とスキーマ2との関連では、スキーマ2はスキーマ1の「移動の経路」を保持していることがわかった。2つのスキーマは無関係のものではなく、スキーマ1からスキーマ2が派生してきたものであった。スキーマ2ではスキーマ1の「移動の経路」のうち、途中の経路はベースとして背景化され、経路の終端である領域内がプロファイルされていた。そして、複数の動作主による行為の結果、領域内の「粗から密への状態変化」を表していることが明らかになった。スキーマ1と2との間に派生の関係が見られたことから、スキーマ1と2から派生された用法も独立の関係にあるのではなく、互いに関連があることが示唆された。

今後は、「～こむ」の前項動詞の性質をアスペクトの面から更に詳しく見ることにより、それぞれの用法の典型的な事例と周辺的な事例について調べていきたい。そこから、複合動詞「～こむ」の前項動詞として用いた場合に、非文となる動詞群についてその理由を明らかにしていきたい。

注

- 1) 以後、方向性添加の用法と呼ぶ
- 2) 「こむ」が後接する動詞を前項動詞と呼ぶ
- 3) 以後、程度深化の用法と呼ぶ
- 4) 『日本国語大辞典』参照
- 5) 以後、一箇所集中の用法と呼ぶ
- 6) 「邦訳日葡辞書」参照
- 7) 動詞二語からなる複合動詞に対し、一語の動詞を単純動詞と呼ぶ
- 8) 「上代語辞典」、「時代別古語大辞典」参照
- 9)、10) 柴谷(1978)による。柴谷は「太郎が 走った」の「太郎」を「走る」が表す動作の主体を「動作主」とし、「太郎は若い」の「太郎」を状態述語「若い」が表す状態または性状の「対象」という意味役割で文構成しているとしている
- 11) 「日本国語大辞典」参照
- 12) 河上(1996) P. 209より抜粋。「プロファイル (profile): Langacker の認知文法における用語。語の意味を得る際に焦点化される部分的な構造。例えば、〈斜辺〉の概念を得る時には、三角形の中のある一辺が焦点かされてプロファイルされることになる。」
- 13) 河上(1996) P. 40より抜粋。「語の意味や概念にまつわる、具体的な知識をフ

レームと呼ぶことが多いが、認知心理学では、知識構造を表すのに、より抽象的なスキーマ (schema) という概念を用いる。スキーマとはあるものや事象に関する過去の経験に基づく知識をより抽象化、構造化して一つのカプセルに納めたもので、人間の記憶もしくは知識というのはこの種のスキーマの集合体だと考えたのである。」

- 14) 河上(1996) P.210より抜粋。「ベース(base): Langacker(1988b): の用語。語の意味を得る際にその前提として概念化されるもので、プロフィールに対してその背景となるもの。例えば、〈斜辺〉の概念における〈三角形〉、〈弧〉の概念における〈円〉など。」

参考文献

- 影山太郎1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 河上誓作編1996. 『認知言語学の基礎 - An Introduction Cognitive Linguistics』
研究社出版
- 斎藤倫明1992. 『現代日本語の語構成論的研究』 ひつじ書房
- 佐治圭三1992. 『日本語の表現の研究』 ひつじ書房
- 柴谷方良1978. 『日本語の分析』 大修館
- 寺村秀夫1984. 『日本語のシンタクスと意味』(第5章格言の文) くろしお出版
- 長嶋善三1976. 「複合動詞の構造」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』大修館書店
- 姫野昌子1978. 「複合動詞「～こむ」および内部移動を表す複合動詞」『日本語学校
論集』5: 47-70
- 森田良行1994. 『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- 森山卓郎1988. 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 山梨正明1993. 「認知言語学 - ことばと心のプロセス」、『日本語要説』、P.235-261
ひつじ書房
- 山梨正明1995. 「認知文法論のパーспекティヴ」『日本語学』第14巻第10号
P.73-91 明治書院
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: Chicago
University Press. (『レトリックと人生』, 渡辺他訳, 大修館書店)
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories
Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (『認
知意味論』, 池上他訳, 紀伊国屋書店)

- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of cognitive grammar, Vol.: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1988). "An Overview of Cognitive Grammar." In Brygida Rudzka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*, 3-48. Amsterdam: John Benjamins.
- Ungerer, F. and Hans-Jörg S. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics* London: Addison Wesley Longman. (『認知言語学入門』池上他訳, 大修館書店)
- 甲斐朋子1998. 「複合動詞「～こむ」の分類とその用法」『国文研究』43 : P.98-112
- 甲斐朋子1999. 「複合動詞「～こむ」の程度深化の用法」『利ガソツ』(第2巻) : P.1-8

資料

- 「語と語との関係解析用資料」一朝日新聞記事データ分析— “に” を中心とした— 田中康仁 1989年
- 「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」 新潮社版
- 「基礎日本語辞典」 森田良行 角川書店
- 「邦訳日葡辞書」 土井忠生 他二名編訳 岩波書店
- 「角川古語大辞典」 中村幸彦 他二名編 角川書店
- 「上代語辞典」 丸山林平 明治書院
- 「時代別古語大辞典上代編」 上代語辞典編集委員会 三省堂